

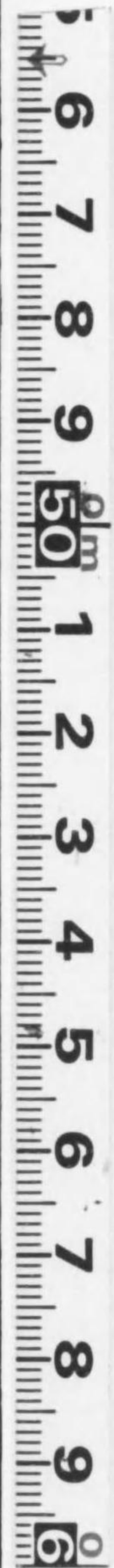
特259

835

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其二十七)



始



特259
835



菅原時保禪師

巖錄講演

(其二十七)



碧巖錄講演其二十七目次

第七十七則 雲門餠餅……………一頁
第七十八則 開士入浴……………二一頁
第七十九則 投子一切佛聲……………四二頁
第八十則 趙州初生孩子……………六〇頁

碧巖錄提講

第七十七則 雲門餠餅

◎垂示

垂示云、向上轉去、可以穿天下人鼻孔、似鶻捉鳩、向下轉去、自己鼻孔、在別人手裏、如龜藏殼、箇中忽有箇出來道、本來無向上向下、用轉作什麼、只向伊道、我也知爾向鬼窟裡作活計、且道、作麼生、辨箇緇素、良久云、有條攀條、無條攀例、試舉看、

讀方

垂示に云く、向上に轉じ去らば、以て天下の人の鼻孔を穿つ可くして、鶻の鳩を捉ふるに似たらん。』向下に轉じ去らば、自己の鼻孔は、別人の手裏に在つて、龜の殻に藏れたるが如くならん。』箇の中、忽ちこゝに出で來つて、本來、向上も向下も無きに、轉ずることを用ひて、什麼をか作さんや、と道ふもの有らば、只伊に向つて道はん、我也た知る、爾が鬼窟裏に向つて活計を作すことをと。』且く道へ、作麼生か、箇の緇素を辨ぜん。』良久して云く、條あれば條を攀ち、條無ければ例を攀ちよ。試みに舉す看よ。』

字解。

向上、』本分の立場、所謂絶對的、是を第一義と云ふ。』
轉去、』活轉、活動すること。』
穿鼻孔、』機先を制すること。』
鶻捉鳩、』活轉の敏捷なることを比したるものなり。

向下、』和泥合水の立場、相對的にして第二義門の轉用。その様子は總てに於て隨他意。その柔順なること龜の殻に藏るゝが如し。』
伊、』彼、對機の人をさす。』
鬼窟裏、』幽靈の住居と云ふほどの意。何事もなさずに露命を全うして居る腰拔の安在處。』

提講。

四

一家をなしたる正師の手元には、自然に向上、向下の二活轉がある。二活轉の其の一は隨、自、意、唯、自、の、境、界。其の二は隨、他、意、唯、他、の、境、界。——唯自の境界に活轉する時は銀、山、鐵、壁、（敢へて斯くするにあらざれども自然に然り。）點、滴、も、施、さ、ず、孤、危、峭、絶。——

故に三世の諸佛、歴代の祖師と雖も悉く氣を飲み聲を呑み倒退三千。況んや其の他のものに於てをや。如何ともなす能はず。其の轉機の敏捷さを鶻の鳩を捉ふるに似たりと云ふ。——

唯他の境界に活轉する時は拖、泥、滯、水、（敢へて斯くするにあら

ざれども自然に然り。）臨、機、應、變、應、病、與、藥。——故に學者よし政治家よし、男よし女よし、強者よし弱者よし、善人よし惡人よし、來るものは一切拒まず、否、時あり出張して慈、悲、の、手、を、垂、る。自己の意旨を聊かも用ひず衆に接する其の落、草、底、を、龜、の、殼、に、藏、る、が如しと云ふ。

以上の向上、向下に對し、井上君の御意見を參考の爲に添へておきます。

井上君云く、「向上的立脚地に立つて活動することになると、天下の人々の鼻をあかし、彼等の機先を制して、丁度、熊鷹が鳩を捉へるやうに彼等を自由自在に把住放行することが出來

五

る。かうなると天下は自己の掌中に歸したと云ふものだ。(是非
お互も斯くなりたきものである。斯くなるには斯くなる修養が
先決問題。) 向下的第二義の生計をしてをると、やア物價騰貴で
泣面をする、やア大風雨で小言を云ふ、やア屋根が壊れた、雨
がもる。もうかうなると自己の鼻孔は他人の手裏にありで、吾
人は外界の手裏の事象の奴隸となつて暮さねばならぬことにな
る。その不自由さ加減、その意氣地のなさ加減、まるで甲の中
に身をかくしてをる龜同様。」(お互は甲の中に身をかくす龜に
はなりたくない。それには如何にすべきや。是れ又修養が第一
である。) 以上は井上君のお説、翫味すべし。

向上、向下につき圓悟禪師が以上の如く會下の大衆に示さる
ゝと、衆中一人あり、出で來つて云く、「本來、向上、向下なし。
轉を用ひてなにかせん。」と。(昔も今も、人情と云ふか、人心
と云ふか、或點に於ては同一である。昭和の今日、四五冊の禪
書を読み、二三回の參禪、それで大悟徹底したものと心得、圓
悟禪師に對して或僧が云うた如き文句を並ぶる人がある。聊か
氣の毒に思ふ。) 此の間僧に對し圓悟禪師、老口を弄して曰く、
「向上、向下、それが癪にさはつたと云ふのか。無理もない。
修行未熟の輩に限つて、識者に笑はるのも知らずに、空腹高心
の閑言語を弄す。かゝる菩提心なき屁理窟を並ぶる人を昔より

鬼窟裏に活計する有機死人と云ふ。貴様の如きは破大乘立枯禪の本家本元と云ふべし。彌勒菩薩が出世なされても、見捨てらるゝ無縁の衆生だ。」

衲ならば、本來向上向下なきに轉を用ひてなにかせん、なぞと云うて出て來る人があれば、委細かまはず三十棒だ。三十棒も與へたら如何なる寢坊でも多少夢が覺めるであらう。總てかれこれと屁理窟を並べる輩は夢中で唇皮を動かして居るのだ。——或點から云へば衲も夢中で閑妄想を吐露して居るのである。——

圓悟禪師、言端を改め、座下の大衆に向ひ、「作麼生、辨箇縑素。」

如何なる處が向上轉去、——如何なる處が向下轉去、——如何なる處が鬼窟裏、如何なる處が非鬼窟裏、——サ、黑白、邪正、是非、得失、一々辨別し來れ。」

一人の是れに應じて出て來る者なし。何れも何れも鬼窟裏に坐在する衣架飯囊でありし。

圓悟禪師、良久、やゝ暫く間をおいて、有條攀條、無條攀例。——條あり例あり、其の條を、其の例を、試みに左に舉す。親切に聽くべし。仔細に看るべし。

◎本則

舉、僧問雲門、如何是超佛越祖之談、門云、餠餅。」

讀方

舉す。僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」門云

く、「餠餅。」

字解。

超佛越祖、文字の如く、佛も超越し祖も超越した談話と云ふ意。今日の言葉で超絶的と云ふ、それに當るかも知れぬ。

餠餅、或人は云ふ、一種の支那饅頭。如何様なるものか、本物は知りません。何れにせよ喰ふものならん。

提講。

或人は云ふ、「此の本則に含蓄されて居る意味を了解しようとするには、當時の歴史的背景を知らねば本當の事は知れぬ。」と。如何にも然りである。されど納は無學を幸に、歴史的のこ

とは専門家に譲り、極めて簡短に管見を述べます。

普通の僧であれば、如何なるか是れ佛、——如何なるか祖師西來意、と問ふが月並である。然るに此の僧、如何なるか是れ超佛越祖の談、と正面から斬り込んで來た處を見れば尋常でない。たとひ背景があるにしても無いにしても、申し分のなき問である。羊頭狗肉の似て非なる宗師家は蓋し如何ともなし得ざる處。然るにサスガ雲門禪師、何の心配も思慮も用ひず、自己が喰ひ餘りの餠餅が座右にあるを幸、ドウダ、さほど上等ではないが、是を一つ食べては、と云うて餠餅を差し出された。可謂、毒藥一時に行ずと。——過つて佛意であるの、祖意で

あるの、又は超佛越祖の談である、なぞと思慮分別を弄したら、雲門禪師の御親切を無駄にするぞ。サア之是の餠餅、頂戴したもののか、——遠慮したもののか、——遠慮すれば雲門禪師の好意に背く。無論頂戴せざるべからず。——聽く、大石内藏之助が、酌婦に、是を進上しよう、と云うて火鉢の火を火箸ではさんで出された。普通の酌婦であれば驚愕して飛出すか腰を抜かすのである。然るに此の酌婦は、所謂老酌婦、(歳は若くとも)泰然自若。是れは、お志有難しと云うて袖で是れを受けました。(袖の焼けるは元より承知。)此の膽力に大石も感心して、種々内助を托したと云ふことだ。(眞偽は不明。)雲門禪師の差出さ

れた餠餅は火でないから、手を出して頂戴しても手は焼けぬ。要は如何にして喫すべきやである。圓悟禪師は下語して云く、「舌上に齧をさそふ。かやうな御馳走にあうては何とも口の開きやうがない。」と。果して然るや。——納は云ふ、「下さるものは何も遠慮するに及ばず。有り難く頂戴して喫却するがよい。マサカ猫いらすが入れてありはすまい。——故大内君は云く、「拄杖子と云ひ、這箇と云ひ、乾屎橛と云ひ、柏樹子と云ひ、毘盧と云ひ、彌陀と云ひ、色々に名がかはるが、今は餠餅と名乗つて来た。」と。果して然るや。大内君、聊か見處が違つてゐやせぬか。——敢へて餠餅を毘盧や彌陀にせずとも餠餅

は、餠餅で、更に差支へない。かれこれと、理窟を並べず、速に喫却して、眞味を知るべし。』

◎頌

超談禪客問偏多、縫罽披離見也麼、餠餅堅來猶不住、至今天下有誦訛、

讀方

超談の禪客の問は偏へに多し。縫罽の披離せるを見しや否。餠餅堅し來りしに猶住まらず。今に至るも天下に誦訛あり。』字解。縫罽、』衣服のほころびのこと。披離、』そのほころび

目が人の目につく程である。—— 罽、』隙間に物をはめこむこと、と或本にはあります。—— 不住、』はめてもクツついてをらぬ。—— 有誦訛、』餠餅の文字に轉ぜられ眞意を知らざる、それを云ふ。』——

提講。

最初の一句は、苟も禪に志す漢は何れも競うて超佛越祖的の問端を拈出する。それは古今東西、一律一體、別に不思議はない。故に圓悟禪師も、麻の如く粟に似たり、と下語された。』衲の處へ訪問さる、禪學者の中に稀には超談の禪客がある。何れも吹けば飛ぶ問で、相手にしても興味がない。』雲門禪師の面前

に出頭し来りし此の超談の禪客は、衲の處へ訪問する、それとは大なる相違ありと思ひの外、井上君の説に依れば、「生活難に追撃されて天下の禪寺を喰ひ廻つておるくせに、超佛越祖の談とはかたはら痛い。こんなトンチンカンの理窟をこねる禪僧が世の中にはすてきに多い。」と。蓋し是れが當時の背景か。——第二句の縫罅云々は、大なるほころび、大なるきず、それが見えぬか、それが知れぬか。——それぞれそこに佛祖超越、それが抑、佛病祖病に取りつかれて居る實證。圓悟禪師曰く、「己に言前にあり。佛病祖病の縫罅の披離は、如何なるか是れ超佛越祖の談、と問はざる以前にはほころびて居るぞ。大なる穴が

あいて居る。然るに自屎、臭を覺えず。御本人は縫罅のあることも、襟や袖がバラバラになつて居る、それにも氣づかず、大手を振つて唯我獨尊で大口を開き來つた。』流石は雲門禪師、問僧の精神上と云ふか、見識上と云ふか、そこに大なる病點のあることを洞見し、一箇の藥品を以て其の病點にはめられた。曰く、「餠餅。」——問僧、雲門禪師の餠餅を一口に喫却し得ずして敢へて更に一問を發した。(雲門錄にありと云ふ。)それを指して、聖來るも猶住まらず。要は問僧の餠餅を喫却し得ざるを斯く吟じたものである。結句は雪竇禪師の長嘆息。——敢へて今日に限らず昔既に然り。大法の隆盛ならざる、故なき

に非ず。—— 餠餅と云へば餠餅と云ふ言句に取りつき、丸
 いか四角か、—— 又は大きいか小さいか、—— 堅いか柔い
 か。—— 故に圓悟禪師云く、「人の言句を咬む、甚まの了期かあ
 らん。言句には味はない。實物にかジリツケ。然らざれば後に
 悔ゆるぞ。」問僧も雲門禪師の餠餅を喫却せざるを後悔したで
 あらう。』衲ななぞも好機を失して後悔せしこと五六にして足ら
 ず。實に残念々々。—— 或酒ずきの人が、夢に上酒一升、到
 來した。冷で飲まうと思つたが、冷では毒になる惧がある。
 故にアタ、メて飲むことにして、其の手順をして居る中に、夢
 がさめた。此の人、大いに残念に思つた。されど今となつては

賊後の弓、如何ともなしがたし。自ら獨語して曰く、「夢である
 と知つたら冷で飲んでしまふであつたに。嗚呼つまらぬことを
 した。」と。さう云ふ話がある。—— 夢中の酒とちがうて、雲
 門禪師の餠餅は實物だ。喫却しようと思ふ人は遠慮なくドシ
 く。—— 然るに強ひて遠慮して喫却しない人が多い。必ず
 後悔することであらう。—— 雪竇禪師の云はるゝ如く、今日
 に至るまで禪僧は無論のこと、禪僧外の人も、此の餠餅につき、
 甘い辛いのと愚鈍極まる大議論を戦はして居る。如何にも氣
 の毒である。』圓悟禪師も雪竇禪師に共鳴して、「大地茫茫、愁
 殺人。何處も彼處も眞參實悟する人のなきは痛歎の至り。」と

云うて居る。——諸君、必ずしも古人の云はるゝ如く敢へて、腰拔の漢となるに及ばず。威氣ある人は雲門の餠を喫却し、其の妙味、斯くの如きであり、と眞參實悟底を吐露し、以て幾多、縫罽披離したる人々の愧を雪ぎ、第一に雲門禪師を喜ばし、次に雪竇、圓悟、それらの老漢を一安心させては如何に。——口は是れ禍の門、咄、狗口を合せよ。

(昭和十五年一月十三日講演)

第七十八則 開士入浴

此の則には垂示がありません。垂示の代りに禪話を一つ添へて置きませう。」

藥山惟儼禪師の門下に、雲巖、道吾、徳誠の傑僧あり。就中、徳誠は節操高邁、度量不群、傑僧中の傑僧。何もの感じたか、師の藥山遷化後、親友の雲巖、道吾に向つて曰く、「君等は各々一方に法幢を建て、先師の遺風を紹隆してくれたまへ。拙者は元來粗野で、唯山水を好み擅に情懷をやると云ふだけが能だ。そこで一つの頼みがある。それは君等が今後大勢の修行者を接

得するうちに、一人、唯の一人だけでよい、靈利の雲水僧を見出して、拙者の處へよこしてもらひたい。拙者が得たところの法を傳へて、先師の法恩に酬いたいから。」——それで互に袂を別ち、徳誠は浙中華亭縣に行き、僧形を捨て一介の船頭となつた。されど眞金は如何なる處にても光を放つ。華亭の船子和尙の名は世間に喧傳せられ、往々大官高士も特に來りて道法を聽くやうになつた。』

此の當時、湖南澧州の京口に、善會と云ふ一禪僧あり。九歳のとき潭州の龍牙山で出家、長じて諸方の講席に遊び、豊かな天性を以て經論に博通し、又禪理の妙處に達し、京口の一山に

住持となり大法を舉揚して居られた。——或日善會禪師が型の如く上堂して大衆の爲に說法、その最中に一僧あり、出て來つて左の如き問答が試みられた。

如何なるか是れ法身、』是れは僧の問。

法身無相、』是れは善會の答。

如何なるか是れ法眼、』是れは僧の問。

法眼疵なし、』是れは善會の答。

答話に於て些の澁滯はない。その時、同席に一人あり、クス／＼と失笑した。——それは此の日、投宿を願うた雲水僧である。善會は素早く高座を下り、雲水僧の前に來り尋ねて曰く、

「拙僧が先ほど一僧の間に對して答へた中に、必ず不十分のところがあつたので、端なく上座の失笑を蒙りました。どこの處が不是であるか。我がために慈悲を吝まるゝ勿れ。」——
 かやうなことは普通の人には一寸出来ぬ。善會、禪師の如きは胸中に一點の私心私情なし。只是れ法のため道のための精進勇猛あるのみ。(お互が採つて以て手本となすべし。) 雲水僧は肅然とし威儀を正して曰く、「禪師は現に當山の御住持であらせらるゝ。残念なことには禪師はまだ正統の師に就いて嗣法をしてをられぬ。」—— 善會、其の言葉を聞き、方に然りの圖星をさゝられた。故に愈々熱心に、「拙僧の不徹底なる點を是非とも明白に

説破なしくだされ。」と懇願してやまず。——

「イヤ拙者は今こゝで説破は致しません。禪師御自身で華亭縣に行き、船子和尚を尋ねて親しく參問せられるがよろしい。」
 「その船子和尚とは如何なる御人物か。」「此の人、上に片瓦の頭を覆ふなく、下に寸土の足を立するなし。全く變つた生活をして居らるゝ人。それであるから、若し貴僧が拙僧の云ふことを聞き、尋ねらるゝならば、大禪師の服裝でなく普通雲水僧の形相をして訪問なされ。」道吾は徳誠とのかねての約束を果したのである。「善會は即時、大衆を解散し、住院を棄て、平の雲水僧となり、一直線に足を華亭縣に向けました。」

華亭の孤舟に起臥して居らるゝ徳誠禪師、——只見る一箇の船頭爺、——善會を一見して先づ問ふ、「大徳は何れの寺に住するか。」

「寺には何れにも住せず、住すれば即ち似ざらむ。」
形の上では船頭と雲水僧との問答であるが、初対面の挨拶としては尋常でない。何となく底力がある。船子和尙、コイツめ、と思うたが、更に

「似ざるとは何に似ざるか。」

「これ目前の法にあらず。」

「いづれの處にか學得し來る。」

「耳目の到るところにあらず。」

善會、なか／＼の意氣だ。こゝで船子和尙、勵聲一番、

「一句合頭の語、萬劫の繫驢橛。——」

此の一句に、善會は今までの冲天の意氣を立ち所に壓しつぶされ、グツと詰まつた。それを見て船子和尙の鋭い語氣は更に一段の迫力を加へ、息もつかせず勸問、

「綸を垂るゝこと千尺、意は深潭に在り。鉤、三寸を離れて、子、何ぞ云はざる。」

絶體絶命の善會、方に一句を吐かんとして未だ口を開かぬうちに、電光石火、船子和尙、手中の水棹はブーンと唸りを生じ

て善會の背中に一撃を見舞った。かはすビマあらばこそ、筋斗を一つ打つて水煙の底深く善會の姿は没した。——暫くして浮上り、やうやく舷に取りつくや、船の上から見下してゐた船子和尙は性急に、「速に言へ、速に言へ。」——と迫る。口を開いて一句を呈せんとするや、又残酷な水棹がブーンと見舞うた。その刹那に善會は痛快な徹底大悟を得たのである。されど如何せん、水の中でアブ／＼やつてゐるのであるから一句を云ふことが出来ぬ。止むなく意志表示として、善會は合點々々と三たび點頭して見せた。それで、やつと船に上ることを許された。茲に於て船子和尙、快然とし、いと朗かに、「竿頭の絲線は、

君が弄するに任す、清波を犯さず意おのづから殊なり。」

永年、船頭生活をした船子和尙、今や竿も糸も用がなくなつた。一切貴殿の勝手に任す。拙者は拙者で別に天地がある。更に二三の問答があり、船子和尙、大満足の意を表して曰く、「江波を釣り盡して始めて金鱗に遭ふ。」と。善會は両手を以て耳を掩ひぬ。其の意は、佛の一字も心田の穢れ、悟りの證明なぞは寧ろ眞つ平。——船子和尙は、如是如是、と云うて先師薬山禪師室中嗣承の法を授受し、後事を懇囑し、善會をして去らしむ。去り行く善會が頻りに後を振向くので、和尙は、「汝は別に我の在ることをおもふな。」と云ふと同時に、水棹でドンと

舟底を突いて舟をひつくりかへし、そのまゝ水中深く永久に姿を消し去つたとある。』——是れは善會禪師が水中にて大悟なされた逸話である。本則の十六開士が水因を悟られたとある参考として、老婆の落草をなした次第である。』

◎本則

舉、古有十六開士、於浴僧時、隨例入浴、忽悟水因、諸禪德、作麼生、會他道妙觸宣明、成佛子住、也須七穿八穴始得、』

讀方

舉す。古、十六の開士有りたり。浴僧の時に於て、例に従つ

て入浴し、忽ち水因を悟れり。』諸禪德、作麼生か、他の妙觸宣明、成佛子住と道ひしことを會すや。也た須く七穿八穴にして始めて得べし。』

字解。

開士、』心華の開きたる人、悟りを開いた人間。是を菩薩又は大士、高士とも云ふ。』

於浴僧時、』僧が入浴なさる其の時、と云ふ程のこと。——
 忽悟水因、』水の本領を悟得した。氣がつく、又は發見。——
 妙觸宣明、』肌ざはりの好きを妙觸と云ひ、視感に色彩の美なるを宣明と云ふ。——
 成佛子住、』嗚呼よい心もち、極樂往生

した様だ。——七穿八穴、』修行事は悪戦苦闘を嫌ふべからず。百練千鍛せざるべからず。然らざれば七穿八穴の腕は備はらぬ。』

提講。

常に恒に油断なく注意を拂うて居れば、如何なる時でも如何なる處でも、大悟徹底は出来るものなり。』諸君の既に知らるゝ如く、ニユートンの落林檎、——ワツトの鐵瓶蓋、——心に注意なく、念頭に油断があれば、如何に林檎が落ちてきようが、如何に鐵瓶の蓋が鳴らうが、決して氣もつかなければ、發見もしない。無論大悟することも出来ぬ。然るに本則に出て居

る十六人は、何れも何れも平素此の事を念頭にかけてをらるゝ方と見えて、一人のみならず十六人が十六人とも同一時に水因を悟つたとは實に稀有なことに云ふべし。』尤も釋迦如來は一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と云はれた、それを思へば別に不思議がることはない。日本などには未だ曾て十六人が同時同處に於て大悟したと云ふ快事を聞いたことはない。』印度の話である。釋迦如來の當時、七人の賢女が尸陀林に行き、「屍、こゝにあり。其の人何れの處にありや。」と云ふ問答で七人は同時同處で大悟されたとある。浦山敷きことである。——十六人が入浴して水因を悟られた、それを拈出して雪竇禪師が會下

の大衆に向つて、諸禪徳、と大聲に呼んだ。——十六人の方々が水槽の中でヤアこれは／＼此の水の肌ざはりのよさ、——此の水の色のうつくしさ、——かねてより聞いて居る極樂と云ふ處があるならば、まるで其の極樂の特別室で特別の優待を受けたより一層よい氣もちである。嗚呼愉快々々。」と身心脱落、脱落身心底であつたと。サア／＼諸君、十六人の方々が如何に水因を悟られたかは十六人の方々になければ眞實の處は知れぬ。されど水に妙觸し、其の水の宣明にして且つ肌ざはりのよき氣分に酔倒し、事實佛子となつた様な好感を得た、と云ふ點位は推察が出来さうなものだ。——敢へて水浴でなくとも、

湯浴でも差問へはない。諸君、毎朝洗面を致しませんか。——毎晩入浴は致しませんか。——毎日々々洗面と入浴をしつゝ、ありながら、未だ曾て水因を悟らぬとは不思議と云ふべし。蓋し、其のもの、それに注意せざるが然らむるのである。——此の本則を参考とし、七穿八穴の活腕を練磨し、速に十六の開士に劣らぬ妙觸宣明を自知、自得、自悟、自證せられよ。——

◎頌

了事衲僧消一箇、長連床上展脚臥、夢中曾說悟圓通、香水洗來麤面唾、」

讀方

了事の衲僧は一箇を消す、長連床上に脚を展べて臥し、夢中に曾て説く圓通を悟ると。香水にて洗ひ來るも蓋面に唾せん。」

字解。

消、一箇、一人で澤山だ、と云ふ意なり。——長連床、「大勢の人が並んで坐禪をする床のこと。——圓通、「耳から悟るを耳根圓通、眼から悟るを眼根圓通。今は身から悟る故に身根圓通である。——香水、「清水の意なり。

提講。

了事と云ふは大事を了得したること。了得したる大事とは自己の本性を事實に掌握したること。サア自己の本心本性とは如何なるものか。——十六開士の如きは水因に依つて自得せられた。どう自得せられた、妙觸宣明。——それが自己の本心本性か。——十六人が長連床上に於て同時に開悟されたと云ふが、由來、大悟とか大事とかは其の様に容易に手に入るものか。眞箇大事を了畢したる人は敢へて十六人の多きを要せず、只是れ一人で澤山。——故に曰く、了事衲僧消一箇と。是れは雪竇禪師の見識。圓悟禪師は雪竇禪師に共鳴し、現に一箇あり、と下語された。一箇とは誰のこと。雪竇禪師を指しつ

、自己を指して居らるゝ。斯く云はるゝ兩禪師も、高所から點見し來れば、或は十六の開士と蓋し難兄難弟ならん。——
閑話は休題として、十六の開士が長連床上に脚を展べて臥して御座る、其の様子を忖度して見ませう。

眞箇大事了畢したる人は、迷悟も凡聖も、煩惱も菩提も、共に超越し、所謂妄想を除かず眞をも求めず、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身、と云ふ絶學無爲の當體、所謂一切の行事が一切の佛事、——一切の言語が一切の佛語、——困じ來れば眠り、飢ゑ來れば食す。心の欲するに隨ひ、心の動くに任せ、一々大光明を放つて四天下を照破す。十六開士の如きは果して

恁麼なりしや。若し然る能はざれば、圓悟禪師の著語の如く、是れ箇の瞌睡の漢で、悟りの夢を見てをる朝寢坊である。』そこらあたりには、朝寢坊がをるぞ。眼を開いて夢を見てをりはせぬか。——夢中曾說悟圓通、此の處へ故大内君は左の如く云うて居らるゝ。曰く、「此の本則の典據たる楞嚴經に於ては二十五箇の菩薩たちが代る代るに圓通の法を説いてをらるゝ。其の中の一人、跋陀婆羅菩薩が十六開士と共に此の妙觸宣明を以て自家の圓通を説かれた。それを雪竇禪師が拈じ來つて、二十五菩薩の圓通法門も皆悉く夢中に夢を説いて居るのではないか。』如何にも夢中の説法だ。夢中と云へば、大内君の四の五の

云はるゝも夢中の夢語。衲がかれこれとブツ／＼云ふのも夢中の夢物語。と思へば何でもないが、なか／＼夢としてはおかれぬ。——そこが凡夫の凡夫たる所以である。』要は十六の開士が入浴して妙觸宣明を悟つたと云ふが、それはおそくさい。生佛不二、本來お互が佛である。——故に圓悟禪師曰く、「寐語して什麼をか作さん。」——十六の開士、眞箇悟つて居るか、悟つて居らぬか。諸君、點見し來れ。——雪竇禪師は、香水洗來、薰面唾、と十六の開士を勘破された。眞正の美人は紅粉を要せず。そこに天生の美がある。眞正の悟りは造作を要せず。そこに自然の悟りがある。されど、是れが天生の顔だ、是

れが自然の悟りだ、と思ふたり云うたら、土上に泥を加へ、頭上に頭を按ず。淨地上に阿屎だ。見にくいくそく。薰面に唾せん。嘘と思ふなら、悟り面を出して見よ。唾一唾して眞偽を點見してやらう。サア面を出せ、サア面を出せ。——

(昭和十五年二月十七日講演)

第七十九則 投子一切佛聲

◎垂示

垂示云、大用現前、不存軌則、活捉生擒、不勞餘力、且道、是什麼人曾恁麼來、試舉看、』

讀方

垂示に云く、大用現前、軌則を存せず。活捉にも生擒にも、餘力を勞せず。』且く道へ、是れ什麼人が曾て恁麼にこ來りしぞ。』試みに舉す看よ。』字解。

大用現前、』宇宙の靈動とも眞理の發動とも云ふ。又は正師家の一擧手、一投足、それも大用現前である。』
不存軌則、』宇宙の靈動、眞理の發動、それには一定の軌則はない。正師家に於ても亦然り。要は千變萬化、無礙自在、一々軌則に依らずして軌則に背かず。』

不勞餘力、』宇宙の靈動、眞理の發動は空間、時間を一貫して常に恒に充滿しつゝある。故に我に生擒活捉の活眼と活力だにあれば、一花一葉、一塵一埃、それらの總てが神であり眞理であり大法であるから至つて容易である。』

提講。

此の垂示は専ら正師家が學者を接するに就ての事と見るべきである。』云ふまでもなし、没量の大人が破衲子を相手にする場合、尋常一様の軌則に依らず、或は把住或は放行、又は横拈又は倒用。——時あり、一莖草を拈じて丈六の金身となし、——時あり、丈六の金身を拈じて一莖草となす。——若しくは奪ふと共に與へ、——若しくは與ふと共に奪ふ。——所謂、應病與藥、臨機應變の活禪機を自由自在に電光石火裏に運轉し、以て學者を接す。之是を活捉生擒に、不勞餘力と云ふ。——若し信じ得ざる漢あらば速に去つて本則を見よ。』

◎本則

舉、僧問投子、一切聲是佛聲、是否、投子云、是、僧云、和尚莫冢沸碗鳴聲、投子便打、——又問、龜言及細語、皆歸第一義、是否、投子曰、是、僧云、喚和尚作一頭驢得麼、投子便打、』

讀方

舉す。僧、投子に問ふ、「一切の聲は是れ佛聲なりと。是なりや否。」投子云く、「是なり。」僧云く、「和尚、冢沸碗の鳴聲なるもの莫しや。」投子便ち打つ。』又問ふ、「龜言及び細語、皆第一義に歸すと。是なりや否。」投子曰く、「是なり。」僧云く、

「和尚を喚んで一頭の驢と作し得るや。」投子すげこ便ち打つ。」
字解。

投子、舒州投子山の大同禪師のこと。此の禪師は、韓退之が佛骨の表を上つて唐の憲宗皇帝の怒にふれ、潮州の刺史に左遷せられた年に生れたと云ふ。即ち達磨大師第十一世の法孫で、雪峰義存、玄沙師備、趙州從諗なぞと同時代と聞く。「實頭にして能辯家だと云ふ評がある。——其の磊々落落たる様子は、趙州禪師が一日、投子和尚に面會に行かれた時、投子不在、趙州待つこと久し、夕方、投子は油瓶をさげて町から歸つて來た、と云ふことであります。以て投子の境致を知るべし。』

問僧、「常に經文の語を借り來つて質問するを以て一種の趣味として居る僧らしい。故に今も亦。

一切聲是佛聲、梵天所問經にも法華經の常不輕品にも其の他の諸經にも散説されてある、と云ふこと。』右は大内君の説をそのまま借用しました。

屎沸碗、井上君云く、「唐宋時代の鄙語で、日本の鄙語の（けつのあな）とか又は（尿袋）とかに相當する語である。」と。大内君云く、「屎は尻なり、肛門のこと。」と。——
沸、肛門沸々の聲。（胃腸の加減わるき時、便所へ通うて見れば自得することが出来る。）——

龐言細語、」涅槃經の第十八卷に、諸佛常轉語、爲衆故說龐、龐說及轉語、皆歸第一義、』とあり、それに依りたるものならん。」

提講。

如何に大同禪師が能辯であり明眼であつても、所謂陷虎の機を以て陥れたら或は沈黙させることが出来ぬとも限らぬ、と云ふ一物を胸に貯へて、問僧は出で來たりしものならん、と古人の意見がある。見様に依つては然りとも云へる。」衲は強ひて穿鑿に亘らず、一應文字のまゝ、言端語端を弄してみませう。」

一僧あり、投子の大同禪師に問ふ、「聞く一切の聲は是れ佛聲

なりと。是なりや否。」——松聲竹音は申すも更なり、風聲雨響は元より、鷄鳴狗吠、馬嘶牛哞、鐘鼓瓠土に至るまで悉く佛陀の音聲である、と云ふことでありますが、果して事實でありますか。」——人あり、來つて斯く諸君に問はば如何に答ふべきや。」——大同禪師は、「是なり。」無論さうだ、と答へられた。是れ何の心行ぞ、と圓悟禪師が大同禪師の是に向つて下語された。寧ろ圓悟に向つて、それは何の心行ぞ、と云うてやりたい。」大同禪師は別に心行のあるなし。是なるが故に是と云ふ。敢へて不思議はない。」——僧云く、和尚莫罵沸碗鳴聲と。左様に和尚の説法なざる聲と胃腸の加減で出た非美術的、

非音樂的の聲と甲乙はありませんか。」と。問僧は只錐頭の利を見て、鑿頭の方を知らざる底の悪平等を振りかざした。大同禪師便打、茲の處で打たざれば大同禪師は盲目の漢となる。」圓悟禪師は、好打、と共鳴してをらるゝ。」諸君、大同禪師の打せられた其の意はサーー云うて見なさい。」——問僧、大同禪師の老婆禪を嫌うてか、將亦意旨の所在不明なるがためか、猶目が覺めぬと見えて、再來半文錢に當らず、と云ふ。それを學ぶとは鈍愚と云はざるべからず。是れに似たる入念の鈍愚漢は、昭和の御代にも。——されど鈍愚に安んぜず更に猛進して問ふ處に多少の望みがある。所謂、千挫不屈、万挫不撓。鈍愚漢、必ず鈍

愚漢に終らず。」又問ふ、「麁言及び細語皆第一義に歸すと。是なりや否や。」——此の麁言及細語云々は涅槃經にありと云ふ。(衲は拜見致しません。)意味は、如何なる麁暴の言葉も又如何なる丁寧な言句も悉く中道第一義に契ふと云ふこと。」問僧に對して大同禪師は、「是なり。それに相違なし。」——すると僧云く、「然らば何と云うても總て中道第一義に契ふならば、只今私は和尚を呼んで一疋の驢馬と申しても敢へて不法ではありませんまい。ヤイ此の驢馬め。」——圓悟禪師、此の僧に下言して云く、「逆水の波ありと雖も、只是れ頭上に角なし。」意は實參實悟の力なしと云ふこと。——實參實悟の宗旨眼なく、

徒に文に依て義を解し、語に着して事實を誤る人、教者にも、禪者にも中々多い。故に宗師家たる人、痴人の面前に夢を説く勿れ。須く人を見て、法を説くべし。特に禪談は一層然りである。」

——大同禪師は問僧に又一棒を與へた。——便打。

是れ又好打である。或人は、「前後同一の軌轍を履むことは甚だ面白くない。されど勢ひ己むを得ざる次第である。」と云はるゝが、何も人に見せたり人に賞讃してもらはふ、と云ふ心でなしたのではない。自己の見識であり、自己の家風である以上は、百千同一の軌轍を履むも敢へて妨げなし。故に圓悟禪師は、着と賛意を表された。」——其の意は、モツトく打つて打つて

打ちすゑれば好い、』と。斯くの如くに大内君は圓悟禪師の心を付度されたが、衲は然らず。聞かずや、酒の濃かなるはもと多盃にあらず。好這の一棒、百千万棒の價値あり。所謂、衆角多しと雖も一麟たれり。」——序に圓悟禪師の意見と風外老人の所思を添へておきませう。先づ圓悟禪師、若し此の僧が本統の作家の漢であつたならば、投子が將に棒を振りあげんとする途端に、グイと其の棒を振り上げてスボンと禪床を掀倒すれば好かつたに、と。是れは圓悟禪師にして始めて好し。」——次に風外老人、投子が是と答へた時に、サツサと拂袖して立ち去つてしまへば、投子は手持無沙汰に置き去りにされるのであつたに、

をしいことをした、と。是れは風外老人の閑妄想。——如何に局外の者がかれこれと心配しても、局に當る御本人が眞物でなく、偽物では、入れ智恵もツケヤキバも無駄である。——丈夫自ら衝天の氣あり、如來の行處に向つて行かず、と云ふ古人の句がある。苟も禪に志さず人は此の句の意を体得して實參實悟せざるべからず。『經文の言句に云々、祖錄の文字に云々、それ等に迷溺し、徒に惡平等を起し、——叨に惡平等を振りまはして居らば彌勒下生の時に逢ふと雖も大悟徹底の曉は來らぬと知るべし。』——

◎頌

投子投子、機輪無阻、放一得二、同彼同此、可憐無限弄潮人、畢竟還落潮中死、忽然活、百川倒流鬧漚々、

讀方

投子投子。機輪に阻らるゝ無く、一を放つて二を得たり。彼に同じく此に同じ。憐む可し限り無く潮を弄せし人。畢竟還た潮の中に落ちて死せり。『忽然として活したりしならんには、百川倒流して鬧漚々たりしならんものを。』

字解。

機輪、『機鋒又は手腕の意味。——放一得二、『意外の利益、もつちの幸。——同彼同此、『此の時もあの時も。——無

限、「いつまでも或は澤山。——開、漚々、」開は喧騒の義。

漚々は水流の音。

提講。

雪竇禪師、投子投子、と投子の大同禪師を賞讃して、「エライぞく」。流石は投子禪師だ。禪師の接化度生は無造作にして能く學者の病に應じ隨機に藥を與へらるゝ。その手腕、無礙自在の大神通は、何人と雖も決して阻礙することは出来ぬ。論より實證、是と云ふ一言、便打の一棒、それも一度ならず二度まで思ふ様に成功したとは何たる幸運であらう。否、幸運ではない。實に敏腕家の敏腕家たる本領である。——苟も一方に門戸を

開き四來の修行者を相手にする宗師家は、是非とも大同禪師の如く無造作にして無礙自在に接化するでなければ、マア門戸を開かぬがよろしい。蓋し一盲、衆盲を引く愁がある。故に心ある人は自省すべし。——自警せざるべからず。——（衲も自省自警致します。）本則に出て居る雲水僧は實に氣の毒千萬である。一度ならず二度まで、是、便打、——是、便打、——身から出た錯、自業自得、泣き寝入りするより外に道はない。——雪竇禪師、雲水僧を葬むる引導語に、可憐無限弄潮人、畢竟還落潮中死、と。必ずしも此の間僧に限らず、昔も今も、東洋も西洋も、多くの佛教學者、就中禪學者、眞如性海の潮流

を弄し、女浪男浪の寄せては返す磯邊巖畔の風光に見とれ、九淵に潜在して居る驪龍領下の珠玉を取り得ずして、還つて潮流に弄せられて死す。如何にも慙むべきである。慙むべきである所以は、葉を摘み枝を尋ねた其の報い、今となりて如何ともなす能はず。』——斯く云はるゝ雪竇禪師も圓悟禪師も、今でこそ何食はぬ顔をして居らるゝが、潮中に落ちて死せしこと蓋し何回ぞ。何れも何れも二十年三十年、潮を弄し潮に弄せられ、千辛萬苦なした其の賜である。』圓悟禪師自白して云く、「愁人、愁人に向つて説く莫れ。」君もか、拙者も、修行中は、雲水中は。今は昔の夢物がたり、——云うてくれるな肩がこる。』——

忽然活、「所謂、百尺竿頭、更に一步を進め、大死一番し來れば、そこに大機大用が現前する。敢へて禪學に限らず世間の事柄も同一。苦は樂の種、——刻苦必ず光明。——聞く、梅は寒苦を経て清香を放ち、斧は盤根錯節に遇うて始めて利を現す、と。——是れは眞理であり大道である。大道は踏まざるべからず。眞理は隨はざるべからず。』「若し本則の間僧が大死一番、再活現前し來れば、それこそ百川倒流鬧漚々たりで、如何に能辯の大同禪師も或は倒退三千里ならん。」と雪竇禪師が云はるゝが、其の時は雪竇禪師も鼻息で吹き飛ばさるゝかも知れぬ。御用心々々々。

(昭和十五年三月九日講演)

第八十則

趙州初生孩子

◎本則

舉、僧問趙州、初生孩子還具六識也無、趙州云、急水上打毬子、——僧後問投子、急水上打毬子、——意旨如何、子云、念念不停流、

讀方

舉す。僧、趙州に問ふ、「初生の孩子、還た六識を具するや無。」趙州云く、「急水上に毬子を打せよ。」僧、後に投子に問ふ、「急水上に毬子を打せよ、は意旨如何。」子云く、「念念不停流な

り。」

此の則には垂示がありません。趙州禪師、投子禪師のことは先に申し述べて措きました。故に今は略します。

本則の問答は投子禪師が三十歳、趙州禪師は七十一歳の時でありし、と傳へてゐる。

字解兼分解。

初生孩子、』生れたたまゝの赤子のこと。

六識、』佛教心理學者の説、圖にして示せば左の如し。

眼境—(色) 眼根 眼識

耳境—(聲) 耳根 耳識

鼻境—(香)	鼻根	鼻識
舌境—(味)	舌根	舌識
身境—(觸)	身根	身識
意境—(法)	意根	意識

(六境) (六根) (六識)

急水上打毬子。或人は云ふ、「是は趙州禪師が、當時の思想海に流れて居る仁王經又は維摩經、それらにある經意を拈出して答へられたのである。」と。然れども眞偽は趙州禪師其人に實參しなければわからぬ。それと同様、初生の孩子に六識有りや無しやは眞箇初生の孩子でなければ察知しても無駄である。

る。されど急水上に毬子を打すとは云ひ得て妙。』

念々不停流、』文字學者に議論させたら高論卓説、麻の如く粟の如く澤山あるであらうが、蓋し急水上に毬子を打すと異曲同工、要する所は初生の孩子となるに在りだ。——

提講。

或僧が一日趙州禪師の處に来て、「初生孩子還具六識也無、生れたまゝの赤子にも六識が具はつてゐませうか。」と尋ねた。

大内君は問僧の心中を忖度して、左の如く云うて居らるゝ。「若し趙州禪師が赤子も六識を具して居ると答へたなら、なぜ赤子に分別がない、と反問し、若し又具して居らぬと云は

れたら、なぜ泣いたり笑つたりする、と詰るつもりであつたらう。」と。——は大内君の意で、問僧の胸中果して然るや否かは断定出来ぬ。——されど研究の資としての一助にはたしかになる。」衲が處に於ては以上の閑妄想は用不着。——單純に赤子も眼耳鼻舌身意の六識を具足して居りますか、具して居りませぬか、それでよし。問僧、趙州禪師の答意が解せぬ。去つて投子禪師に再問す。「急水上に毬子を打す、其意思如何。」と。投子も趙州禪師と同穴の野狐。故に云く、「念々不停流。」と。

——念々不停流の妙味を知らんと欲せば急水上に毬子を打すと云ふ妙味を知らざるべからず。急水上に毬子を打すと云ふ妙

處は念々不停流にある。何が故ぞ。向上の鉗鎚を明らめんと要せば、須く作家の爐鞴なるべし。言句は死物、體得は活物。禪は死物を嫌ひ活物を愛す。古人云く、死句に參ずべからず活句に參ずべし、とは蓋し之是を云ふ。

◎頌

六識無功伸一問、作家曾共辨來端、茫々急水打毬子、落處不停誰解看、

讀方

六識無功一問を伸ぶ。作家曾て共に端を辨じ來る。茫々たる急水に毬子を打せよ。落處に停らず誰か看ることを解せん。」

字解並に分解。

無功、』無駄とか無自覺とか云ふ意にして無功用と云ふ意ではない。

曾共辨來端、』趙州禪師も投子禪師も、相談をした如く問僧の胸中を洞察して居る、と云ふ意味である。

落處不停、』是は急水上に毬子を打すと念々不停流を併せ吟じたのである。

誰解看、』事實に急水上の毬子になり、眞箇に念々不停流にならねば、たとへ釋迦でも達磨でも自知することは出来ぬ。』提講。

僧が趙州禪師に向つて、初生の孩子還つて六識を具するや、またなしや、などと問うたは愚問である。知らずや趙州禪師は有力の大人だ。決して問僧の間網にかゝる様な盲目僧ではない。所謂眞箇の作家、明鏡臺下に娟醜を分つは尋常の茶飯、未だ問僧の口を開かざるにはや來意を知る。況んや開口一番するに於てをや。』初生の孩子の六識底を知らんと欲せば急水上に毬子を打いて見よ。——斯く云はるものゝ、落處とゞまらず見んと欲して見えず、聞かんと欲して聞えず。故に曰く、誰か看ることを解すや。如何にも然りである。そのものそれになるべし。そのものそれにならずして、百萬遍、口舌を勞したとて總に是

407
433

昭和十五年八月一日印刷
昭和十五年八月八日發行

著者兼
發行所
印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

六八

れ無駄。趙州禪師の急水上、——投子禪師の念々、——何
れも初生孩子の實體であり、本質である。千思萬考、一箇の孩
子となるに如かず。作麼生、之是の孩底。——云ふ勿れ、才
ギヤア〜と。

(昭和十五年三月二十三日講演)

終